

## 「国語」の出題の意図

国語の問題は、高等学校までに培った国語の総合力を判定することを目的として、文科・理科を問わず、現代文・古文・漢文の三分野すべてから出題されます。選択式の設問では測りがたい国語の主体的な運用能力を測るため、解答はすべて記述式としています。なお、文科・理科それぞれの教育目標と、入学試験での配点・実施時間をふまえ、一部に文科のみを対象とした問いを設けています。

第一問は、現代文の論理的文章についての問題です。文化人類学者の吉田憲司氏が、仮面というものの存在、装置としての仮面をつけることの意味について述べた文章を題材としました。論旨を正確に捉える読解力と論理的思考力、それを簡潔に記述する表現力が試されます。また、ある程度の長文で、論じられている仮面の意味についてまとめる表現能力を問う問題も設けました。

第二問は、古文についての問題です。鎌倉時代の仏教説話集『沙石集』の一話「耳売りたる事」を題材としました。古文の基礎的な語彙・文法の理解をふまえ、自分の耳を売ってしまった僧が福運に見放されていく様子を、比較的多い登場人物を整理しつつ、正確に理解できたかを問いました。文科ではさらに、文中のエピソードの内容について、文脈を踏まえて具体的に表現できるかどうかを問いました。

第三問は、漢文についての問題です。唐の太宗と近臣たちの政治議論をまとめた『貞観政要』を題材としました。漢文の基礎的な語彙・文法をふまえ、旧時の名臣とされた何曾の言行に対し、唐の太宗が異議をとらえた議論を正確にとらえているか、また個別の表現をきちんと理解しているかを問いました。文科ではさらに、語句の具体的内容を、文脈に即して説明する問題も設けました。

第四問は、文科のみを対象とします。今回は詩人である長田弘氏が言葉を自身の力で十分に吟味して用いることの重要性を説いた文章を題材としました。文中の比喻や作者の主張を正しく読み取り、自分なりの言葉で適切に表現できるかどうかを問いました。自立的な思考能力と、豊富な語彙を自在に操れるだけの読書量を有することが求められます。